

日本語教育の目的

蒲 谷 宏

はじめに

日本語教育に携わる者の一人として、一体何のために日本語を教えるのか、ということをいつも考えさせられる。

この日本語教育の目的とは何かという、言語教育の理念に関わる問題について、現段階での私の考えを、今後の私自身の実践のために述べておきたいと思う。

1.

日本語教育の目的の中心が、学習者の日本語力を上達させるという点にあることは間違いないのだが、それでは、何のために日本語力を上達させるのだろうか。

たしかに、日本の大学における日本語教育に関していえば、学習者(留学生)が学部あるいは大学院での専門の講義を理解し、ゼミに参加し、レポートや論文を書くことができるようにさせるという、かなり具体的な目標がある。

また、大学や大学院への進学を目指す学習者のために、試験対策の日本語教育を行うこともある。

一般の日本語学校などでは、そのような進学の前準備課程としての日本語教育や、日常生活に必要な日本語を教えたり、あるいはまたビジネスのための日本語、短期・長期の技術研修者のための日本語の教育などを実施し

ている。

このように、学習者の目的が明確になっている場合には、それに応じて対策を講じる必要があるだろうし、また学習者の要求も、その目的を達成するために必要な日本語力を身につけることにあるのだから、それを日本語教師が助けていくのだという考え方は、ごく自然であり、そのこと自体は何ら否定されるべきことではない。

しかし、このように学習者の目的や要求に応じるという、ただそれだけが日本語教育の目的になるとすると、どこか積然としない思いに駆られるのである。

学習者が生活に必要な日本語を要求すればそれに応え、専門用語の知識だけが必要ならばそれだけを教え、面接試験の対策を考え、と学習者の目的で日本語教育の目的が決定されていけば、何でも引き受けるかわりにその幅広い要求に、ひどく中途半端な、不完全な形で対応せざるを得なくなるのではないだろうか。

ただ日本語だけを学ぼうとする者も少ないであろうから、日本語学習の目的は実に様々なものであり、中には全く不純な動機や目的をもつ者もあるかもしれない。そのような学習者にも、その目的に合わせた日本語教育をするという事になってしまう。

全く不純な目的をもっていることがわかった場合には、教えることを拒否すればよいのかもしれないが、どういう場合に拒否するのか、その基準を決めるのも実はなかなか難しいのではないだろうか。

教師の側がもつ、教育の目的や理念があって、その上で学習者の要求に応じていくという姿勢がないと、日本語教育の主体性がなくなってしまうのではないかとおそれるのである。

学習者の目的に合わせただけの日本語教育では、結局、日本語は単なる金儲けのための道具だから利用価値がなくなればすぐに捨ててしまえるものであり、日本語教師は経済力、技術力を背景とした企業国家“日本”の手先にすぎない、というような意識を学習者に植えつけてしまうのでは

ないだろうか。

学習者に迎合することなく、また日本語の“侵略”に手を貸すことのない、教師の側としての日本語教育の目的をしっかりともっていなければならぬと思うのである。

2.

それでは、日本語教師として、日本語教育の目的をどこにおけばよいのだろうか。

このことを、言語教育一般の目的と関連させて考えていきたい。

まず、言語教育の内容となる「言語」についてどう考えるのか。そのことが言語教育の目的とも深く関わっていると思われるので、その点から述べていくことにする。

言語とは、人間(言語主体)が、何らかの影響(場面)を受けながら、自己の思想感情(素材)を、音声・文字(媒材)をもって、外化し表現する働き(表現過程)、あるいは、何らかの影響(場面)を受けながら、音声・文字(媒材)から、相手の思想感情(素材)を理解する働き(理解過程)である、と規定することができる。

これについても様々な意見が出ることと思うが、要するに、人間の表現、理解の行為自体を、「言語」と定義づけるわけである。

以上のように言語を捉えると、言語教育は、音声・文字を媒材とした、人間の表現行為、理解行為の教育、ということになる。

したがって言語教育の目的は、それらの行為が円滑に行われるようにさせることとなるのだが、その点をもう少し詳しく述べると次のようになる。

言語行為は、表現主体(話し手・書き手)の立場としては、

- ① 表現素材(自己の思想感情)をその言語形式に従って表現する。
- ② それを理解者(相手としての聞き手・読み手)が理解しやすいように表現する。

理解主体(聞き手, 読み手)の立場としては,

- ① 表現に即して, 表現内容の一般的意味を理解する.
- ② 表現者(相手としての話し手, 書き手)の表現意図, 真意を理解する.

というようになる.

実際の言語行為は, 場面として他の要素が複雑に絡んでくるのだが, 場面を代表するものとしての「相手」の概念を導入することが言語教育では極めて大切なことだと考えられる.

言語教育の段階としては, 理解 ① → 表現 ① → 理解 ② → 表現 ② のように進めるということになるだろう. 要するに, 自分が表現したいことを過不足なく, 相手に理解しやすいように表現でき, 相手の表現の真意を理解できるようにさせるということが, 言語教育の目的となるわけである. これは, 基本的には, 母語の教育においても, 外国語の教育においても同様だと考えられる.

たしかに, 外国語教育の場合を考えると, 表現, 理解ともに, ① の段階にまで達すること自体が容易なことではない. しかし, そのことを承知した上で, あえて言語教育の目的を ② の段階の達成におきたいと思う.

それは, 言語行為において, 相手に理解されない表現や, 相手の表現意図から離れた理解をしても意味がないという実際的な理由と同時に, 相手に通じるように表現し, 相手のことを理解しようとするという, 相手への配慮, 理解の姿勢を習得させる点に, 言語教育の意義が見出せると考えるからである.

特に外国語教育の目的は, 自己と異なった認識, 概念化の方法に触れ, 異なった構成法を学ぶことを通じて, 相手を理解しようとする姿勢をもたせ, 自己を見つめ直す契機を与えることにあると考えられるのである.

自分の思考法の殻を破り, 我を捨てて相手のことを理解しようとすることまでを教育の目的におくことにより, 言語教育が, 単なる技術教育で

はなく、人間の育成を目指す教育となるのではないだろうか。

ユーモア、皮肉、虚偽をも織り混ぜた相手の微妙な感情、願いや祈り、意志、認識、思考などを理解し、それを前提とした表現をしていくという行為の習得を目指してこそ、真の言語教育の役割が果たせると考えるのである。

言語は、決して道具などではなく、人間がその風土、環境の中で人間らしく生きていくために不可欠な、人間の様々な知恵の結晶ともいべき行為なのである。その行為を「文化」と規定するならば、言語教育とは「文化の教育」ということになる。

日本語教育の目的は、学習者が日本語の表現、理解を円滑に行えるようにすることである。ただしその意味は、日本語の表現、理解行為を通じて、日本人(日本語を母語とする者という意味)が、感情、認識、思考などをどのように表現し理解するのかを、掴んでもらうということなのである。

学習者に、道具としての日本語を与えてはいけない。学習者の相手としての日本人を理解してもらうことを、それが学習者の人間的成長にも役立つという意味も含めて、日本語教育の目的におきたいと思う。そうであってもこそ、日本語教育が、日本の文化を理解してもらうことにつながっていくわけである。

3.

以上のように、日本語教育の目的を、学習者に日本人の文化としての日本語を学ばせ、日本人を理解してもらうことにおいたのだが、この考え方には、いろいろな問題点や誤解を招きやすい部分もあるかと思われる。

次に、それらの点について述べておきたい。

まず、日本語教育の目的は、学習者に日本語の体系を能率的に習得させることにあり、日本人の気持ちなどを理解させることは主たる目的にはならない、という反論が出るかもしれない。

もちろん、先に示した①の段階では、言語の体系的側面を段階を追って教育していかなければならないのであって、いきなり日本人の文化を理解させるなどということではできない。

ただ言うまでもなく、①の段階で日本語教育の目的が果たせたと考えることもできないのである。

日本語の体系を習得した上で、言語使用者のことを考える、などというのではなく、体系を習得する過程において、同時にたえず「相手」に対する配慮をさせていくことが、言語教育にとって大切なのではないだろうか。

このことは、場面の教育などとも関連するのだが、日本人の考え方や感情が理解できなければ、日本人を相手に自分の意図を的確に伝えることはできない。体系だけを教育するのでは、結局、学習者に何も与えられなかったということになってしまうであろう。

次には、上とは逆に、日本語教育は実際に役に立たなければならず、あくまで実用的であることが重要なのであり、日本人の文化などと悠長なことを言っていられない、という反論もあるかと思う。

しかし、文化を学ぶということと、実用的であるということとは決して対立しない。文化としての日本語が学べていないならば、実用的にもならないのである。

実用的であるということが、先に述べたように、ただ教育の目的を学習者の目的に合わせるだけという意味であるなら問題であると思うが、言語行為の四技能の上達を目指し、言語を単なる知識として教育するのではないという姿勢を示すものならば、特に問題にはならないだろう。

ただし、言語における技能的な面のみが強調されてしまうと、何のために技能を上達させるのかが見失われてしまう。翻訳機械のような人間を造り出すことが、言語教育の目的となってよいはずがない。実用性だけを重視する落とし穴もその辺にあるのではないだろうか。

また、実際の場面に即した言語教育といっても、先の①の段階を飛ば

して行うことにはやはり無理がある。言語の体系的側面を無視したのでは、結局、言語の断片しか教育できず、学習者は応用がきかなくなってしまうからである。

次に、外国語学習者にとっては、学習言語は情報伝達的手段にすぎないのだから、何もその言語を母語とする者の微妙な感情を捉える必要もないし、ましてや、ネイティブスピーカーと同じように表現、理解できるようになることはない(実際にほとんど不可能である)という考えもあるだろう。

特に、英語のような国際語となった言語などでは、英米人の感情、思考法などとは一応切り離して扱っていかねばいけないということも理解できる。

しかし、日本語の場合は、現段階においては、まだ日本人の思想や感情と切り離して扱うことはできないと考える。そうでないと、学習者が日本語の表現方法に対する誤解、ひいては、日本人に対する誤解をしてしまうのではないだろうか。是非はともかくとして、日本語にある多くの婉曲的な表現や、表現内容と実際の感情とのずれがある表現などについて、なぜそのような表現方法をとるのかということ、理解してもらふ段階なのではないかと考えるからである。

また、外国人が日本語を学習することを考慮して、国際語に一步でも近づけるために、日本語を簡略化していこうとする考えがある。

微妙なニュアンスにはこだわらずに、平明な骨子だけを残すというもので、たしかに一理あるのだが、それがもし外国人だから日本語の繊細な部分はわからないという前提に基づくものであるなら問題となろう。

わからないから簡単にしていくという発想では、文化としての言語教育は成り立たなくなってしまう。血の通わない形骸化した言語の教育、学習になってしまうだろう。

わかりやすく、しかも日本人の微妙な気持ちまでも反映している、そういう日本語表現を理解してもらふことにより、日本人を、そして日本の文

化を理解してもらいたいと思うのである。

日本語はとかく論理的でないとか、複雑に受給表現や待遇表現が発達していてわかりにくいということなどが、よく指摘される。事実、そういう点が認められる場合もあるのだが、完全な誤文を除いては、そのあるがままの表現を通じて、日本語の表現方法やその背後に潜む日本人のものの考え方、感じ方などを捉えてほしいと思う。

たしかに、学習者が日本人と同じように表現する必要はないが、日本人と同じように表現することはできないと考えたり、してはいけないなどということではできないのである。教師の側で先回りして、学習者の可能性に枠をはめてはいけないのではないだろうか。

なお、先にあるがままの日本語といったが、やはりできるかぎり、美しい日本語を学んでほしいという願いもある。これは何も日本人が特別に繊細で感受性に富んでいるなどと言いたいからではない。美しい言語表現（必ずしも文学作品を意味しない。表現、理解行為を実践したときに感じられる美しさである。）からは、人間の深い思考、より鋭い感性などが汲み取れるからである。

日本語を学ぶことにより、日本語や日本人の欠点ばかりが見えてくるといことは、日本語を教える者にとって、やはり悲しむべきことではないだろうか。

また、「文化」の教育というとき、日本語教育の場合、なぜか書道や茶道、能や歌舞伎などの伝統芸能、寺社の建築様式などという方向で考えられるか、あるいは日本人の手ぶり身ぶりなどの動作、挨拶のしかたなどが取り上げられやすい。

もちろん、それらが日本語教育において大切でないことはないが、言語自体を文化と考えていく立場からは、それらは言語の一部かまたは言語から離れた要素であろう。

また、社会学や文化人類学的な成果を参考にすることも大切だが、それ自体を教えることは日本語教育本来の目的ではない。

これは、日本人の思考法や認識法を理解させることが目的ならば、何も日本語教育としてではなく、別に日本人学のような知識として与えればよい、という考えとも関係する。

たしかに、知識として与えられる部分はそれでよいと思うが、表現理解の実践を通じてでなければ、掴めないものは多いだろう。

翻訳などによって内容だけを理解すれば事足りる場合もあるだろうが、翻訳では、その表現形式に現われた表現主体の意識や感情は伝えきれない。

形式と内容とは完全に切り離すことはできないのであって、日本語の表現、理解を経ることにより、日本人の心が掴めると考えられるのである。

また、日本人を前面に押し立てて文化教育などというのは、どこか胡散臭く、文化理解などといいながら、実は日本語の侵略のお先棒を担いでいることになるのではないか、という批判もあるかもしれない。

しかし、これは全くの誤解であり、文化の教育というのは、相手のことを知ろう、理解しようとする心を育てる教育なのである。だから、日本語教師としては、日本人のことを理解させるのではなく、理解してもらおうというような姿勢でいる必要がある。

これはもちろん外国人学習者に卑屈な態度をとれといっているわけではない。もともと外国語教育というのは学習者にかなりの無理を強いているものである。まして、異文化の理解というのは、口で言うほど生易しいものではないだろう。決して無理に理解させることなどではしない。そもそも教育に強制があってはならない。決して学びたくもない日本語を学ばせるようなことをしてはならないのである。

しかし、どんな目的であっても学ぼうとしている者に対しては、日本語の学習を通じて未知のものを知り、新しい発見が得られるようにさせたいという教師の願いを捨てることはできない。

日本語は所詮道具にすぎないと考えていても、日本語を深く学ぶことによって、日本や日本人のことをよく理解するようになるかもしれない。学

習者の目的と学習の結果とは必ずしも一致しないのだから、日本語教師としては、そのような現象がより多く起こるような日本語教育を行っていかねばならない。そのためにも、日本人の心を理解してもらおうと努力する必要があるのではないだろうか。

また、これと関連して、それほど高度な日本語を必要としていない学習者に対して、無理に日本人の心の教育などといっても迷惑な話であり、かえって日本語嫌いを育ててしまうのではないかと、日本語教師は学習者の目的に合わせて、学習者の必要な日本語力を高めることだけを目的とすべきである、という意見もあるだろう。

たしかに、すべての学習者が、上級さらにそれ以上の段階へ進めるわけではなく、またその必要があるわけでもない。

問題は、そのような初級程度で日本語学習を終わってしまう学習者に対する教育である。日本人の心を伝えたいなどといっても、動詞の活用を教えている段階で、どうそれを伝えればよいのか、実際の教場では途方に暮れてしまうかもしれない。一時間一時間の授業に文化としての日本語の教育を反映させることは難しいことであろう。

しかし、初級段階から一貫して文化の教育をする姿勢を、教師がとにかくもつかもたないかでは大きな差があるのではないだろうか。

理念だけのかげ声倒れにならないようにしなければならないが、初期の段階から日本語を文化として捉え、それを教育の目的として掲げていけるような教育姿勢をとりたいと思う。そのための日本語の研究、日本語教育の研究が、今後の実践課題として必要になることは言うまでもない。

おわりに

日本語教育が何やらブームになりつつある現在は、日本語教師としての姿勢が問われる時機なのではないか。日本語教育の理念に関わることで、その目的について拙い考えを述べてきたが、大方の御叱正を賜われれば幸いである。